

この場面は、心情の表現がうまく使われている。「昼間の明るさは……」のところや、「外の景色は闇に……」のところでは、暗い思い出を暗示させている。また、「友人」の行動、例えば、「ちようを見せたい」と言ったのに「もう結構」と言っているところなどは、「友人」の嫌な思い出が分かるような気になる文である。

井上智元さん

作者は、多くの怪しい行動を出すことで読者を引き込み、「客」からは暗いような気持ちを表す言葉を出し、過去に何かあったか、続きを気にならせようとしていた。

奥村壮太さん

作者は、暗示といった技や叙述の工夫という物をたくさん使っていて、深く読まないと分からない。しかし、こういった技を使うことで、効果的に心情・情景を表すことができるようになった。「客」の気持ちをどんどん暗くさせていった。とても展開がうまい。

伊藤雄一朗さん

一場面では、「色あせた湖」とか「外の景色は闇に沈んでしまひ」などの言葉を使って、気持ち暗くなっていく様子が表現されている。

道家万智さん

「客」↓「彼」↓「友人」と、話が進む中で呼び方が変わっているから、呼び方を変えることで話を展開している。暗くなっているような暗示を使い、客の思い出に何かありそうということが分かった。客の矛盾した行動にも、その時の客の気持ちが出てくる。

長屋未来さん

友人の矛盾した発言や行動で、「何かあるな」と思わせようとしていることが分かりました。一つ一つ細かい説明で、暗い感じを与えて、暗い思い出の印象を与えようとしていることが分かりました。

林 真那さん



ヘルマン・ヘッセ

オオクジャクヤママユ ↓

ヘッセの名言



愛されることが幸せだと、誰もが思っている。しかし、実際のところ、愛することこそが幸せなんだ。

運命は、どこかよそからやってくるものではなく、自分の心の中で成長するものである。

自分の道を進む人は、誰でも英雄です。

君がどんなに遠い夢を見ても、

君自身が可能性を信じる限り、

それは手の届くところにある。

神が人に絶望を与えるのは、

その人を殺すためではなくて、

新しい生命を呼び起こすためである。